



同窓会だより

新潟大学歯学部同窓会会員各位

新潟大学歯学部同窓会

会長 多和田 孝 雄

平成17年3月吉日

皆様の温かい義援金への御礼

謹啓

桜の開花が各地から聞かれる候となりましたが、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、この度の義援金募集におきましては、時節柄何かと出費多大の折りではありましたが、大勢の会員の皆様からご協力を頂き心より御礼申し上げます。

本同窓会事業史で初めての義援金募集で不安もありましたが、10月23日の大地震発生後、全容がある程度つかめた26日に、即座に義援金募集の必要性を考え検討に入りました。ただ、本同窓会にはこれまで「天災等に被災された場合の見舞規約」が無く、検討を重ねている段階で寄付をしたいとの催促を受けるなど積極的な支援の声もございました。そのような温かい会員の後押しもあり、比較的迅速に対応し義援金をお願いすることができました。予想に違わず、実に500余名の大勢の方から500万円以上という多くの暖かい義援金が寄せられました。被災された会員の皆様には金額の大きさもさることながら、多くの方々の温かい応援の眼差しを感じつつ、復興への勇気と決意を揺ぎ無いものとされ、早い復旧を成し遂げてくれるものと期待して止みません。

全国の会員の皆様には、今後とも互助のお気持ちで同窓会事業への御理解と御協力をよろしく御願ひ申し上げます。

敬具

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科 設置記念祝賀会

平成16年4月1日付で設置された「口腔生命福祉学科」誕生と、三名の新教授の前途を祝して、7月24日(土)にホテルイタリア軒にて「新潟大学歯学部口腔生命福祉学科設置記念祝賀会」が挙行された。出席者は招待客を含めて74名と、実に会場狭しとばかりの盛会となった。

会の冒頭、多和田同窓会長が、同窓より2名の教授が誕生し、また歯学部の兄弟に当たる学科ができて、同窓会としても可能なバックアップをしたい旨の挨拶があり、学科長の大島教授からは前例のない学科を設置するに当たつての意義などのお話を頂いた。本学科の設立には多くの方々が尽力されたが、中でも田邊義浩先生、井上 誠先生、大内章嗣先生のご努力は忘れてはいけないと付け加えられた。

祝辞は大学副学長の河野教授と副病院長の宮崎教授より、祝電は長谷川彰新潟大学学長と柳本雄司新潟大学全学同窓会連絡協議会会長より頂戴した。いずれも、口腔生命福祉学科を始めとする歯学部並びに歯学部同窓会に対して、新潟大学全体として大いなる期待を寄せているものだった。

新たに教授になられた富沢美恵子教授、福島正義教授、山崎和久教授からはそれぞれ、この学科に求められる将来像と学生教育に関する決意と抱負、4年後に訪れるであろう就職活動に際し協力頂きたい旨の御挨拶があった。

続いて本学科の設立構想に早くから着手され、実現に貢献されてこられた花田前学部長の乾杯の御発声で、祝宴に入った。同窓生が一堂に会する機会は多分14年前の歯学部創立25周年・同窓会創立20周年記念祝賀会以来と思われる。乾杯遅しとばかりに先輩後輩が酒を酌み交わし話し弾み、会場は熱気と笑顔にあふれ、楽しいひと時があった





言う間に過ぎてしまった。

同窓会、同期生、同門と新教授の関係の方々より祝辞を頂戴した。各々の教授の学生時代や人となり、今後に期待することなど多岐にわたったお話であったが、祝宴の最中ということで聞き取りにくい場面もあったかもしれないがご容赦願いたい。

また、公用のため遅れて到着された山田学部長からも、祝辞を頂いた。山田学部長は本学科の設立実現に大変御尽力され、明るい将来像を話された。

多和田同窓会会長、山下新潟県支部長、本間新窓会会長より各教授に記念品贈呈の後、野村同窓会副会長の万歳三唱が元気よく続き、活気冷めやらぬうちに、山下新潟県支部長の閉会の辞となり、本学科並びに三人の新教授のご活躍と同窓会の更なる発展を誓って、閉会となった。

平成16年7月24日(土)

於 ホテルイタリア軒

主催 新潟大学歯学部同窓会

共催 歯学部同窓会新潟県支部

後援 新窓会

【式次第】

- | | | |
|----------|-------|----------|
| | | 司会 赤坂 長右 |
| ・開 会 | | |
| ・挨拶 | 同窓会長 | 多和田孝雄 |
| | 学科長 | 大島 勇人様 |
| ・祝 辞 | 学部長 | 山田 好秋様 |
| | 理事副学長 | 河野 正司様 |
| | 副病院長 | 宮崎 秀夫様 |
| ・祝電披露 | | |
| ・新学科教授挨拶 | | 富沢美恵子様 |
| | | 福島 正義様 |
| | | 山崎 和久様 |
| ・乾 杯 | 前学部長 | 花田 晃治様 |
| ・祝 宴 | | |
| ・祝 辞 | 元同窓会長 | 梶川 幸良様 |
| | 前同窓会長 | 神田 正一様 |
| | 新窓会会長 | 本間 裕様 |

5期生 近藤 修六様

8期生 幾野 博様

同門代表 柳村 光寛様

・記念品贈呈

・万歳三唱 同窓会副会長 野村 修一

・閉会挨拶 県支部長 山下 智





とり、よりいっそう相互の理解を深めるようご協力を賜りたいとの挨拶があった。

宮崎副病院長 山田学部長

「新潟大学歯科医師臨床研修必修化に向けた体制整備に関するお願い」の資料が配布された。平成18年より実施される研修制度では、新潟大学で50名程度の研修医を受け入れる予定であること、大学では総合診療部で5名のスタッフを確保しているが、それでも大学の施設のみで50名を受け入れることは困難な状態であることと前置きされた上で、協力型臨床研修施設についての説明があり、同窓会に対し臨床研修施設への協力依頼があった。これは開業医が協力型臨床研修施設の指定を受けた上で研修医を受け入れるものである。施設（診療所）の主な条件は、常勤の歯科医師が2人以上、ユニット3台以上、開業歴が3年以上、などであり、指導医の資格は7年以上の臨床経験を持つ歯科医師あるいは5年以上の臨床経験をもつ専門医であり、指導講習会を受講することである。開業医が研修医を受け入れるに当たってのメリットやデメリット、指導講習会を新潟大学で開催予定であること、卒業直後の研修医の治療技術、卒前教育などに関して話し合いがもたれた後、現時点では開業医には直接のメリットが感じられないが、同窓会としては研修制度への協力を同窓会員に呼びかけることとした。

平成16年度第1回歯学部教授会・同窓会定期協議会開催

渉外理事 杉本浩志(20期生)

日時：平成16年8月4日(水) 午後7時から

場所：日本料理「しまや」

出席者：(教授会) 山田学部長、宮崎副病院長

：(同窓会) 多和田会長、赤坂副会長、佐藤副会長、宮野副会長、鈴木副会長、成田専務理事、杉本渉外理事

多和田会長挨拶

はじめに、7月24日に行われた新潟大学歯学部口腔生命福祉学科設置記念祝賀会が盛会となったことに対し、会長から関係各位に感謝の意が述べられた。

続いて、今後とも同窓会と大学との連絡を密に

鈴木副会長

新潟大学では新たに健康保険で認められた歯科治療総合医療管理料にかかわる症例を受け入れている。その他にも、開業医では困難なCTなどの検査なども広く受け入れており、今後とも紹介率を上げる方向で考えている。また、このように大学と開業医が連携することにより、より患者の立場を踏まえた治療に結び付けられるのではないかと考えている。これに対し同窓会側からは、大学内部でのセミナーなどにとどまらず、大学で紹介を受けたケースを簡単なプレゼンテーションとして同窓会員に発送することができれば、セミナー





に出席することが困難な開業医にとって、病診連携の内容をより身近に感じることができ、大学病院に紹介することも容易になるのではないかとの提案があった。

歯学部、附属病院の将来像等について

同窓会より将来像につき質問するが、学部、病院とも将来像についてはまったく不明と回答。歯学部に関してはマイナスの要素が多いと思われるが、口腔生命福祉学科が設置されたことはプラス要素である。歯学部としては、歯科以外の企業との連携も行っており、外部に門戸を開いている。

同窓会と学生のかかわりについて

成田専務理事より、同窓会と歯学部の学生のかかわりは現状では密なものではないが、同窓会の存在を学生にとってより身近にするための方策が示された。佐藤副会長からは同窓会出身の教授名簿が配布され、多数の教授を輩出していることを学生にも知らせる等の案が出された。

全学同窓会について

全学同窓会の交流会があり、この中で歯学部をアピールしたいので、同窓会のみならず、大学側からも出席してほしい旨、依頼があった。これに対し、大学側は快諾。ただし、全学同窓会に対しては、その活動内容など、今後とも注視すべき点がある。

赤坂副会長挨拶

今回の協議会も、中身の濃い議論がなされた。今後とも、同窓会、大学側相互に情報交換を密にすることを約束した。

「最強！ ドクター奥田のペリオ・インプラント実習」を受講して

17期 桑名 一 明

平成16年11月28日(日)に大学補綴学実習室にて

「最強奥田のペリオインプラント実習」を受講させていただきました。準備された先生方、同窓会の先生方に心より感謝いたします。

この研修は前から期待していた研修で楽しみにしていました。何度本を読んでもよくわからない歯肉弁根尖側移動術、Free gingival graft、骨膜縫合をはじめ、GTR、エムドゲイン、インプラントなどの最近特に popular になってきた治療法の基本術式を半日の中で密度濃く、実習という形で学ばせていただきました。

なかなか実習という形で歯周外科を学ぶ機会はなく、非常に貴重な体験でした。ひさしぶりに学生時代に戻った気持ちで、時折その時の記憶が頭をかすめるのか冷や汗が流れるほど真剣にとりくませていただきました。

しかし学生時代とはまったく異なり、まさに手取り足取り細かなところまでやさしく丁寧に御指導いただき、充実した気持ちで終了することができました。

今回地震の影響もあり参加したくても参加できなかった先生方もいらっしゃると思います。卒業後研修としてはかなり貴重な研修だと思いますので何年かに一度また開催していただけると幸いです。

「最強！ ドクター奥田のペリオ・インプラント実習」を受講して

23期 原田 学

「この場合はこの術式の適応でいいのかな?…」
「この切開の絵はこういうラインで良いのかな?」歯科治療の適応症、テクニック、その勘所などは、本を読んでも、なかなかわかりにくい事が多く、いつも治療しながら、これで良いのかな…と常に思っていた。特に歯周外科は、日常臨床でかなり汎用の技術であるにも関わらず、なかなか本からはその勘所が伝わってこないもの。今回、同窓会セミナー企画として、ドクター奥田のペリオインプラント実習の連絡があり、「これだ!」と、





優柔不断な私にしては珍しく迷わずに申し込んだ。

当日はもはやノスタルジックなものさえ感じる補綴科実習室に朝9時集合。教室のあちこちで、いろんな先生方同士で「お久しぶりです」「今なにしてるの？」などの声が聞かれ、いかにも同窓会セミナーらしい雰囲気。始めに奥田先生が、「最後に残った10人は掃除…とか言わないからゆっくりじっくり実習してって下さい」とにこやかに言われ、実習室の緊張感を一気に和ませてくれた。「そういえばいつも居残り掃除したなー」などとふと学生時代に思いを馳せる。学生時代にやった豚顎実習では、切開線の位置を間違え、ライターに怒られた事も脳裏をかすめた。嫌な事を思い出しつつ実習がスタートした。

実習は、GTR、エムドゲイン、歯肉弁根尖側移動、ディスタルウエッジ、遊離歯肉移植、結合組織移植、インプラント植立、各種縫合法など、盛りだくさんな内容。普段臨床で自分なりにしている術式から、「これがあの、噂の…」的な術式まで、とにかく色々手を動かす実習だ。説明通りに一つ一つやっていくと、なんとか出来る事は出来るのだが、「きれいに」出来ない。縫合では近遠心で縫われてる位置がずれてる…。遊離歯肉移植の移植片が微妙に小さい…。部分層弁なのに部分的に骨膜がない…など不具合多数。やはり豚顎実習は自分にとって鬼門なのだろうか？（単に不器用なだけ？）

しかし、今回の実習では、そこそこ豚顎と時間を好きに使えたので、納得のいかない所は自分の判断で再度やり直しもでき、失敗した所もある程度身に付いたと思う。受講生5人にインストラクターが1人付いてくれたので、学生実習の時よりこまめに質問もしやすく良かった。臆する事なく質問出来るのも、同窓会セミナーならではだと思った。

実習が終わった時、なぜかちょっとほっとしている自分がいた。おそらくその理由は、新しい知識を得た喜び以上に、今まで自分なりにやってきた歯周外科の基本的なところや、ペリオ治療の概

念が間違っていなかった事が確認、そして整理できたからではないだろうか。技術的には今日の実習だけで急うまくなれないとは思いますが、少しずつ症例を選んで臨床に生かしていきたいと思う。最後に、休日にも関わらず熱心に指導して頂いたインストラクターの先生方、どうもありがとうございました。



大揺れの小千谷から

21期 棟方隆一

2004年10月24日午後8時、私は国道8号線を、ひたすら小千谷市を目指してハンドルを握っていた。車には数日分の食料と水、そして車中泊用の布団を積んでいる。昼食を食べてから何も口にしていないのに不思議と空腹感がなく、また休み無く運転しているのに、疲労感がない。睡魔に襲われてもおかしくないはずが、目の輝きはしだいに増してさえた。

10月23日午後5時56分、まさに新潟県が大きく揺れたその瞬間、私は学会参加のため東京にいた。またそれに伴い、妻子は群馬県の実家に帰省中であつた。中越地震のニュースを耳にした私は、その規模に驚いた。と同時に病院職員としてとにかく小千谷へもどろろと決意し、24日の昼過ぎに車で群馬県を出発したのである。関越自動車道が不通のため、長野県を経由して日本海沿いに北上し、ようやく柏崎市の標識が目飛び込んできたところだ。普段ならここから小千谷までは距離にして約20km、40分間のドライブである。しかし今日は状況が全く異なっている。報道によれば小千谷へ続く道はそのほとんどが通行止めとなっているようだ。運良く小千谷へ行くことができたとしても、いったん小千谷へ入れば数日間はお出ですることはできない覚悟も必要である。私は国道8号線沿いのコンビニの駐車場へいったん車を止めた。暖かい缶コーヒーを飲みながら、レジの店員と会話を交わす。私の目的地が小千谷であることを告げると店員は即座に「それは無理です」などと言う。それに同意すれば折れそうになる気持ちを抑えながら、「なんとか帰る道を探します」と短く答えるのが精一杯。忘れずに今宵の晩酌用？の酒も購入し、準備完了とばかりに店を後にした。さあこれから小千谷へのアタック開始。武者震いを抑えつつ、まずは精神統一、覚悟を決めて小千谷へ向けてハンドルを切った。

まずは最短ルートである小国町からの国道をひ

た走る。街路灯の明かりはなく、車のヘッドライトだけが頼りだ。ものの五分もたたないうちに通行止めのストッパーに行く手を阻まれるが、まずはまよと無視。きつと必要以上の安全確保のための標識だろうとお気楽な気持ちである。お、倒木があるね、危ないな、よけましょう。お、道路に段差があるね、危ないな、減速しましょう。峠のすぐ先は小千谷だからとアクセルを踏む。お、車があるな、でも不自然な止め方だな。暗がりの中、目を凝らすと…おおっ！ 地割れにつつこんで、乗り捨ててあるじゃないの。こりゃいかん、引き返そう！私はきびすを返し脱兎のごとく柏崎へと引き返した。

「通行止め」は本当に車が通れないということであつた。その当たり前のことを改めて認識し、越路町からのルートでアタック開始。山道をしばらく走ると、またもや通行止め。ひとは学習する生き物、今回は素直に従いましょう。

またもや柏崎、振り出しに戻る、である。幸い、柏崎から長岡へは迂回しながらも道が通じているようだ。三度目の正直と今回は長岡からのルートでアタック開始。途中、小規模な段差はあるが、道路は走行可能、なんとか越路町を通過。そして最後に警察による関門を突破すると車はゆつくりと小千谷市中心部へと進入した。24日深夜未明、暗がりの中に車のライトに照らされた自宅マンションがようやく見え、ロングドライブが終わった。

町に明かりは無く、そして静まり返っている。時折車が通り過ぎるが、不気味な静けさがあたりを支配している。もちろんマンションにも明かりは無く、各部屋にはバイタルサインもみられない。倒壊する恐れは無いにしても、この建物に入るにはかなりの勇気が必要だ。手元に懐中電灯も無く、月明かりだけが頼りである。私は肝試しよろしく、おそろおそろ階段を上り、3階の自宅のドアを開けた。

暗がりの中、つーんと異様な臭いが鼻をつく。予想どおり、玄関近くの酒蔵部屋では破損した酒瓶のガラス片が散乱し、貴重な貯蔵酒が壊滅的な被害を受けていた。おおっ！大切な大切なボルド



一の赤、思い出の詰まった石垣島の瓶貯蔵の泡盛古酒…。が、逆にこれで覚悟は決まった。家財道具は全滅したと思えば良いのだ。けがをしなかっただけありがたいことだ。

次いで、勉強部屋？を覗いてみる。本棚は倒れ、パソコンが吹っ飛んでいる。しかし水気が無い分、酒蔵部屋よりも片づけが楽そうだ。

今度は台所。案の定、食器戸棚が倒れて、割れた食器類の破片が散乱している。また、冷蔵庫のドアが開き、食品が飛び散っている。鋭利なガラス片も散らばっているの、これ以上の深入りは危険！とすぐさま撤退。

最後に寝室。予想通り、ここは壊れるものもなく、普段と変わらない様子である。とりあえず、ここで寝ることはできそうだ。私は一安心すると同時に、さすがに疲れを感じ始めていた。

私は空腹感も覚え、早速、晩酌？の準備にとりかかった。もちろん、部屋には電気、ガス、水道の供給が断たれている。まずは明かりが必要だ。私は酒蔵部屋の一角に狭いながらも居場所を作り、一階の倉庫から探し出したコールマンのガソリンランタンを灯した。真っ暗な部屋から一転、部屋中にやわらかく、暖かい光が広がる。これだけでも緊張感がやわらぎ、元気もわいてくる。明かりに感謝しながら、早速、コンビニで購入した赤ワインを開ける。つまみは乾きもの。まずは家族が無事だったことに感謝し、そしてこれからの復興を願い紙コップで乾杯。今夜のワインはなんとも言えない不思議な味がする。次は日本酒だ。これもいつもとは違う味わいである。部屋ではときどき揺れを感じるが、余震で揺れているのか、酔っぱらって揺れているのかよくわからなくなってきたな。まあこんな夜もあるよなと、無人マンションでの一人酒はしばらく続いた。

25日午前6時5分、私は「ゴーッ」という重低音に目を覚ました。その直後、縦揺れの衝撃波がおそってきた。あわてて飛び起きた私が、これが余震であることに気付くのに時間はかからなかった。後に何回も経験することになるのだが、地震の際にはまずは地鳴りが響き、その後一步遅れて

揺れが私達を襲う。この時は記録では震度5強であった。

迷惑な自然の目覚ましに揺り起こされた形とはなったが、今日から活動開始、まずは職場の病院へと直行した。新聞等で報道されているとおり、そこはまさに野戦病院の様相を呈していた。一番安全な一階ホールに、入院患者が所狭しと寝かされており、その合間を職員が走り回っている。家屋が倒壊する恐れのある近辺の住民も多数避難している。電力の供給が断たれているため、重症患者は近隣の病院へ転院していた。

病院内を見渡すと、重力に導かれるようにして、全ての器材は倒れ、物品は散乱し、そして壁が崩れている。スプリンクラーが誤作動したため、廊下は水浸しだ。病棟では上方の階ほど被害が大きく、その揺れのすさまじさを物語っている。院長に言わせると、地震の瞬間は「ミサイルが撃ち込まれたと思った」ほどであり、また「部屋のなかでゴジラが暴れている」と形容した人もいた。この時点で院内でのマンパワーは充足しており、また安全な居場所も無いため、まずは自宅待機との指示を受け、私はひとまず病院を後にした。

自宅周辺では車中泊やテント生活をする被災者の姿が目についた。近所の住人同士、小集団を作っている。仲間がいるのは心強いものだ。車庫に避難していた知人を見かけ、声をかけたところ、水やおにぎりなど、必要最小限の緊急支援物資は配給されていた。後の報道によると、中越地方で水や食料などの緊急物資を一定量蓄えていたのは小千谷市だけであった。なんとも心強い市である。

市役所では市長が長となり、緊急対策本部が設置されていた。あたりを見回すと、敷地内には各地から送られてきた支援物資が山積みとなっている。一日にトラック30台分の物資が届いているとのこと。数日後には物資の置き場が無くなり、悲鳴を上げることになる。市役所駐車場はパラボラアンテナを宙に向けた報道機関の車に占領され、満車である。ここは出入りする人も多く、異様な活気に満ちていた。

市役所に近接する警察署と消防署に足をむけて





みる。署の前の道路には応援に駆けつけた各県ナンバーのパトカーや消防車が何十台という数で駐車しており、それらがみな、クルクルと赤色灯を回して、これもまた異様なきらびやかさである。余談になるが、警察と消防は自活が原則であり、救援物資は受け取らないそうである。後日、救援物資を届けに行った私が言われたのだから間違いなし。

周囲の状況を確認し、いったん自宅へ帰り、昼食をとる。とりあえずは、買い込んでおいた弁当やパン、あるいは冷蔵庫内の食品で数日はもちそう。この日の午後には、新潟市からシンワ歯研の社長がバイク便で駆けつけてくれ、即席麺、水、カセットこんろなどを差し入れてくれた。おかげで、これらの物資も合わせて、結果的には一週間ほど食いつなぐことができた。小雨の降るなか、バイクに乗った社長の姿を見たときは、涙が出るほど嬉しく、そして頼もしく思った。被災者は他人からの情に触れるたびに涙もろくなっていくのだが、これが記念すべき第一回目の泣きであった。

自宅ではライフラインの供給が断たれ、復旧のめども立っていない状況である。水について言えば、飲料水はあるが、トイレや手洗いなどの水が無い。幸い、自宅の裏には側溝に小川が流れていたの、バケツを持って水くみへ。地震後で濁ってはいるが、なんとか使えそう。これから水道が復旧するまでの9日間、この川の水にはお世話になりました。洗髪にも使ったし。ありがとうね。

この時点で私には新潟県歯科医師会からの要請で、臨時歯科診療所の開設ならびに診療、そして避難所を回る口腔ケアなど医療班コーディネートの依頼が入っていた。電話をしてきたのは、本学大先輩の鈴木一郎氏、暇そうな私を見抜いての人選だった。県歯科医師会主導のもと、新潟大学、日本歯科大学新潟歯学部、新潟県歯科衛生士会、新潟県歯科技工士会、そして地元歯科医師会員の有志からなる医療チームが結成され、ボランティア活動は11月21日まで続けられた。その間、私はこの仕事に従事することとなる。

臨時診療所は市役所横の小千谷市健康センター内に設置された。県歯科医師会からは多くの器材や薬品が搬入され、すぐにもほぼ全ての応急処置ができる体制が確立された。ここでは連日に涉り、急患への対応がなされた。

避難所は当初は大小合わせて300近くもあり、全てを回ることは不可能であった。避難所の場所や規模などの情報は小千谷市ボランティアセンターに集められていた。救援物資を支給するために走り回ったバイク隊などが、足で集めた情報である。それらの情報をもとに、私達は数百人から数千人規模の避難者がいる避難所から訪問を開始した。小千谷小学校、小千谷高校、小千谷市総合体育館などがその代表格である。

中でも小千谷市総合体育館は、3000人も市民が避難生活を送る最大規模の避難所であった。館内は床一面に隙間無く毛布がしかれ、横たわる被災者で埋め尽くされていた。ここではボランティアの介入も最大規模で、自衛隊による炊き出しや仮設風呂をはじめ、医師会相談所、日本赤十字医療班、薬剤師会相談所、飲食コーナー、床屋、マッサージ、ペットホテルなどが常設されており、ひとつの独立したコミュニティを形成していた。

私達はここに歯科医療班による常設の相談所を設け、口腔ケアおよび歯科関係の物資の提供を11月半ばまでおこなうことになる。治療に関しては、いち早く応援に名乗りを上げてくれた神奈川県歯科医師会から、医療班が検診車で乗り付けてくれ、被災者の診療にあたってくれた。この素早い対応に危機管理能力の高さを感じる。新潟県歯科医師会からは十分量の物資が供給され、その内容は多岐に渡っていた。ハブラシ、ハミガキ粉、歯間ブラシ、リステリン、入れ歯洗浄剤、栄養ドリンク、キシリトール飴、マスク、イソジン、デキサルチン軟膏…などである。それに加えて、どこからか紛れ込んできた救援物資の濡れティッシュ、かみそり、口紅、リップクリーム、ホテル用のハミガキセット、紙おむつなどが搬入され、さらには隣の薬剤師会が提供する薬が混在し、ブースはドラッグストアと化していた。隣同士ということもあ





り、薬剤師会チームとは人的にも混じり合い、お互いのテリトリーを超えて活動にあたった。混雑時は我々が薬の相談を受け、また薬剤師会がハブラシを渡す光景が見られた。こうして、我々歯薬合同医療班のテーブルの上に置かれた救援物資は、多くの被災者に手渡された。皆、多くのものを必要としていた。

当初は壊滅的な被害を被った当地も、日を追うごとに着実に復旧が進んだ。

ライフラインでまず復旧したのは電気である。暗い部屋に明かりがともった時のうれしさは忘れられない。灰いでもどつたのは水。拙宅では9日後に復旧した。実は、水道が復旧する前日、私は午後半日の休みをもらい、群馬の妻の実家へ妻子に会いに行っていた。そこには居間でくつろぐ妻と娘の姿があった。私を見つけると同時に「おーしゃーん」と近づくと娘を抱きしめた瞬間、それまでの張りつめていた緊張が一瞬にして崩れさった。私はあふれ出る涙を止めることができなかった。そこには普段の家族の日常があった。もう娘を離すことはできない。感情が理性に優っていた。翌日私達は覚悟をきめて小千谷へと戻った。そして、偶然にもその日の夕方に水道が復旧したのである。強運な家族である。そして最後はガス。ガスは管が地中を通っているため、修理、点検には土を掘り起こす必要があるため、最も時間と手間を要する。拙宅でガス開通の処理をしてくれた方は東京ガスからの応援隊であった。彼は、何日間も家には帰っていないので家族に会えず寂しい

が、ここが頑張りどころだと笑顔で語ってくれた。

ガスの供給が断たれている間、私は避難所に設営された自衛隊の湯を利用していた。その仮設風呂は各自衛隊によって特色があり、シャワーが付いている所や、わざわざ湯沢温泉の湯を運んできて供給してくれるところなど、たいへんありがたい存在であった。一方、共通する点もあり、それはお湯の番をするのはどこでも一番若い隊員であることだった。彼ら、彼女らは入浴する被災者が気持ちよく使えるよう腐心し、帰り際にありがとうと言っていた。それを言うべきはこちらなのに。

自衛隊が仮設風呂を撤収する最終日、私は娘を連れてお礼を兼ねてお邪魔した。この時は自宅での入浴が可能となっている家庭も多く、仮設風呂を利用する人は少なくなっていた。最盛期は一時間待ちの列ができるほど混雑していたことを考えると、少し寂しい気もする。自衛隊の湯最後の入浴を済ませ、出口にいた若い女性隊員に「今までありがとうございました」と述べ、握手をしたその刹那、一粒の涙が私の頬を伝わった。自衛隊には炊き出しも含めて世話になった。演奏会も開いてくれた。その透き通った音色は乾いた私達の心に染み入るようであった。日頃は縁遠い存在であった自衛隊が身近に、そして頼もしく感じられた。最後に隊員と握手をした瞬間、辛い被災生活の中で彼らから受けた様々な恩恵が頭の中を駆けめぐっていた。12月21日、自衛隊解団。

段差のできた道路も急ピッチで工事が進んだ。関越自動車道を含めて、地割れや段差で寸断され





た道路は、夜を徹しての作業により予想以上に早く修復され、順次、車の通行が可能となっていた。工事車両に目をやると、その多くが県外ナンバーであった。

信号機の故障や地割れなどで通行に障害がある現場では、交通整理をする多くの警察官にも出会った。彼らは24時間体制で路上に立ち、車に指示を出し続けていた。その傍らに駐車しているパトカーには、他県の県警の文字があった。復旧へ向けて、多くの人達が力を貸してくれていた。

今回の中越地震は中越地方を中心に甚大な被害をもたらした。2004年10月23日午後5時56分は私達にとって忘れられない時となった。私達は田畑、家、あるいは職など多くのものを失った。さらには、家族を失った者の悲しみは筆舌には尽くしがたいものであろう。山古志村を含め、元どおりの村や町の姿を取り戻すことは困難な地域もある。私達には、これから復興へ向けての長い道のりが待っている。雪国での暮らしで培った強い精神力で乗り越えていくであろうことを祈りつつ、筆を置くことにする。

最後にとりともめなく思いついたことを少々。

- ・私が出会った著名人。天皇皇后両陛下、曙、ボブサップ、ムサシ、井堂日函会長、島田洋七、泉田県知事、シエル/斉藤。皆様に元気づけられました。
- ・災害救援車両。警察へ申請し、災害救援車両に認められると、有料道路はタダ、通行禁止区域も通行可能。これはホントに助かりました。
- ・賞味期限。電力が止まり、冷蔵庫は大きな食品倉庫と化した。中身は全く無事。室温の中で数日間耐えた食品は、ありがたく全て食べた。もちろん、賞味期限など関係なし、単なる表示にすぎません。
- ・妙高高原旅館組合。組合では被災者を一泊三食付きで、一日2,000名のキャパで受け入れてくれた。もちろん無料。暖かい風呂と料理で心から癒されました。感謝しています。
- ・見舞金。震災見舞など、普通は経験が無く、相

場もわからないもの。私がいただいた見舞金は5,000円から30,000円まででした。ありがとうございました。

- ・炊き出し。避難所で民間ボランティアによる炊き出しで食べたもの。博多ラーメン、うどん、そば、カレーライス、カレーうどん、芋煮、クレープ、汁粉、甘酒。総合体育館ではこれに加えて自衛隊による三度の食事があり、さらに10時と3時のおやつもついた。
- ・救援物資。一番多かったもの。それは水です。二番目に多かったもの。それは酒です。一番困ったもの。佐渡の漁師から送られてきた寒ブリ一本。魚屋に持ち込みました。そして何よりも嬉しかったもの。それは皆様からの暖かい心です。ありがとうございました。

新潟県中越地震に被災された皆様には心からお見舞い申し上げます

2004年10月23日に起こった震災は長岡市・小千谷市・十日町市周辺の地域に甚大な被害をもたらしました。被災地周辺には50名を超える同窓生が在住しており、幸い人的な被害はありませんでしたが、自宅・診療所や勤務先で大きな被害を受けた方々があられます。

震源から80km程度離れた新潟市では、大きな揺れを感じた程度で被害はほとんどありませんでしたが、道路や鉄道が寸断され、特に東京方面へのアクセスが断たれたことは、今後長期に渡り社会・経済活動に支障を及ぼすと思われます。

被災地では今なお多くの住民の方々が避難所などで生活を送っていますが、医療面では外傷中心の初動期から内科系のサポートが重要な時期に移行しています。報道ではいわゆるエコノミークラス症候群、風邪や精神的なケアなどがクローズアップされていますが、阪神淡路大震災ではいわゆる避難所肺炎の発症に口腔ケアが不十分であったことが大きく関わっていたとのレポートがあり、口腔ケアを中心とした歯科のサポートも大変重要です。新潟大学同窓会では県歯科医師会や日





歯大新潟と共同して被災地で歯科医療支援活動を行っていますが、現地の同窓生の方々には大きなサポートをいただいています。

さて、同窓会事務局では、同窓生の被災状況につき震災直後から様々な情報ルートによる情報収集を行ってきました。個々の方の被害状況については同窓会事務局宛にお問合せください。

新潟大学歯学部同窓会(事務局)
951 新潟市学校町通2-5274
電話：025-229-4166
Fax：025-229-4166

現在、同窓会では現在地震や風水害などの天災を対象とした「見舞規約」の策定を行っておりますが、11月6日の臨時理事会において、本年度重なる風水害および今回の新潟県中越地震に対して見舞金の支給と義援金の募集を行うことを決定いたしました。

